

# Judith Wright の詩と Pioneer Women

## (5) *Woman to Man* に見られる生命の諸相

### Judith Wright's Poems and Pioneer Women

#### (5) The Image of Life in *Woman to Man*

(2002年3月29日受理)

橋内幸子  
Hashiuchi Sachiko

Key words : Judith Wright, Pioneer women, オーストラリア性

## I. はじめに

*Woman to Man* は、Judith Wright による最初の詩集、*The Moving Image* (1946) が出版された3年後に編まれた詩集である。その中に収められた40編の詩は、*The Moving Image* に提示されたテーマやモチーフを継承してはいるものの、1949年前後に Judith Wright が意図した主張が明確に表現されている。

1965年1月14日、John Thompson は、彼女へのインタビュー<sup>1)</sup>の中で、*Woman to Man* では、「今までにほとんど表現されたことのなかった、女性による世界観 (a woman's view of the world that hardly had ever been expressed before)」による新しい地平が構築されていることを明言している。そして、まず、John Thompson が、女流詩人によって開拓されるべき包括的な経験の分野があることを信じるか否かの質問に答えて、Judith Wright は、それを肯定した上で、女性たちは、人生の経験の持つ意味を熟考することに関しては、有利であると答えている。次に、女流詩人が、同じ分野の男性とは異なる特質があることについて、以下のように述べている。

Oh, I think that's necessarily so, because women are much more inclined to rely on their basic experience. They're more in touch, as it were, with life in raw. They're not dealing with it in the same way that men are. They're coping

more day-to-day, and I think that women have to rely a good deal on their emotional reaction to life, rather than their intellectual reaction to life; and I feel that one has, one's really walking a knife-edge there. One can't over-develop one's intellect or one loses the emotional reaction. The basic touch with life probably is women's main strength. 2)

いわば、人間が多少とも向き合わねばならない、「人生そのもの」がある。それに直接的に関わり合うのは、女性である場合が多く、しかも、男性とは異なる処し方をする。日々、直面する人生の断面に、知的ではなく、感情的に反応せざるをえないのである。女性たちの、知的すぎず、情感を失うことのない対応、つまり、人生とのそのような基本的な関わりこそ、女性の持つ主な力の源泉であろうと、彼女は確信しているのである。

そして、この力こそ、*Woman to Man* の詩編が、読者に、いわゆる詩としての新しい息吹を感じさせる原動力になっている。本稿では、この *Woman to Man* の一つ一つの詩を、各パーツとして女性の感受性の全体像ともいえるものを形成していった、Judith Wright の詩作の軌跡を辿っていくことを、第一の目的とするものである。

## II. Judith Wright と *Woman to Man*

Judith Wright が、2番目の詩集として *Woman to Man*

を出版した、1949年前後の個人的状況と世界の歴史的情勢は、それぞれの転換期を迎えていたと言える。革新的な変化には、その源泉となるさまざまな要因があるものである。言葉による表現を第一義とする詩人であっても、個人としての人生と、世界の歴史からは、自由になれないからである。

まず、Judith Wright の個人的事情に関しては、詩人としての地位を確立しつつあったことがある。1946年に、最初の詩集である *The Moving Image* をメルボルンの Meanjin Press から出版し、新しい視点でオーストラリアを描く詩人として、評判が高まりつつあった。2000年の年末にオーストラリアへ資料集めに出かけた筆者は、ブリスベンの大きな古本屋 Archives Fine Books で、Meanjin Press から出版された、その詩集の初版本を入手した。ハードカバーの表紙はオレンジ色の布で、見開きのページに印刷されたタイトルには赤のインクも使われている。表紙の色も褪せ、ページの紙も黄色がかったベージュ色に変化しているものの、活字の間から、詩人と出版者の意気込みが伝わってくる。その Meanjin Press の編集者であった Clef Christensen の知り合いで、哲学者の Jack McKinney に会い、哲学的な問題を二人で論じるようになる。

1891年生まれの Jack McKinney は、次の世紀の1915年に生まれた Judith よりもはるかに年上であった。ニュー・サウスウェールズ州の裕福な牧畜業者の家の娘であった Judith とは異なり、彼の父はジャーナリストであり、母の弟は探検家として有名な Robert O'Hara Bourke であった。彼は、この探検家の家系を誇りとしていた。「独自のやり方ではあったが、彼は探検家であった (In his own way, he was an explorer)<sup>3)</sup>」からである。その探検への姿勢は、まず、第一次世界大戦への志願に表れた。アキレス腱に問題があって入隊が許可されなかった彼は、既に入隊していた友人の軍服を借り、入隊リストに名前がないまま、戦地へ出かけて行った。戦死は免れたものの、ヨーロッパ戦線でのごんごうなどでの死の恐怖や戦争の悲惨さは、帰還してからもトラウマとして残り、顔面蒼白などの症状は、Judith の眼前でも起こっている。戦後、1920年に結婚し、4人の子供ができたが、第二次世界大戦が始まり、日本軍の脅威が迫ったため、妻は彼を残して、去っていった。Judith が彼に会った

のは、この時期であった。同じ哲学的な命題といえるものを、二人とも持っていたこと、また、彼女がその時期に直面していた課題の解決についての最終的な手がかりを、彼との議論の中で掘り出したこと、が、二人が親密になったきっかけである。解決のキーワードは 'radical change' であった。つまり、西洋文明の行き着いた果ての世界戦争を経験した二人にとって、'西洋文明ではない何か' を見つける必要があったのである。そして、広島と長崎に落とされた原子爆弾の脅威を知って、そのやり方が、戦争を終わらせる効果があったという意見を否定し、世界の破滅への始まりと判断したことも、二人とも同じであった。

Judith は、University of Queensland での統計処理の仕事をしていたが、ゴールドコーストの海に臨む Mount Tamborine に小さな家を買って、家を出ていた Jack に住むように取り計らった。詩作を自分の天職と確信していた Judith は、難聴の進行もあって、大学の仕事よりも、創造性のある分野に時間を割けるように計画した。1947年、Judith は、Commonwealth Literary Fund から助成金を得て、一年間の休暇をもらい、自分の家系を中心にした歴史を書き始めた。それが、彼女の祖父母たちの時代を、祖父の25冊の日記から考証した *The Generations of Men* である。Judith は、熱帯雨林の自然に囲まれた Mount Tamborine の家で、Jack と生活を共にしつつ、議論と執筆の時間を過ごした。Veronica Brady は、*South of My Days - A Biography of Judith Wright* の中で、この時期の詩人の様子についても、書かれた詩を引用しつつ、詳しく描いている。ともあれ、Judith Wright にとって、それまで出会ったことのない種類の人間であった Jack McKinney との出会いは、人生と詩作の面で、意義深い転換をもたらしたのである。

Judith had never met anyone quite like him. He was asking the kind of questions she had been asking for some time and she soon decided that the answers he was suggesting might make the radical change she was looking for. But she also found him fascinating as a person. He was witty, famous for his Irish jokes, which he would tell with his blue eyes sparkling,

and she found him “a joy to be with”. His mind, too, was “like none I had come across in its quickness of apprehension, its surprising and, to me, often illuminating, comments on books and theories I thought I knew about”.<sup>4)</sup>

そして、彼との生活は、新しい生命をももたらした。1950年、一人娘 Meredith が誕生した。アカデミックな教育を受けていないため、大学で教えることはなく、収入の面で不安定であった Jack は、Judith にとって、共通のテーマについて、同等の立場で議論ができるメンターであり、Meredith の父親であった。

このような状況のもとで書かれた詩を収めた *Woman to Man* には、当然のこと、‘女性であること’と‘生命’という、ファクターが色濃く出ていることも理解できよう。*Woman to Man* の詩作品の前には、‘愛’についての Francis Bacon の言葉が引用されている。前作 *The Moving Image* のタイトルが、プラトンの観念的な表現、「時間は永遠の動く影である」に基づくこととは対照的に、より人間的な要素が描かれているだろうことを暗示する始まりである。つまり、「混沌」を除いて、最も古いものである‘愛’は、神によってあらゆるものに刻印されているにもかかわらず、人間の思想の中では、完全に承認されていることはまれである」という言葉には、逆説的な肯定の響きがある。自然の中にあまねく存在している‘愛’を認識するには、理性を指針とする知識から離れて、自然の法則にたち帰る必要がある。そして、*Woman to Man* に集められた、Judith Wright の詩行からも同じ趣旨の響きが聞こえてくる。

### III. 母 と 子 供

*Woman to Man* には、母と子供の間をテーマにした詩が4編ある。自分の胎内にいる子供とその誕生の時を想う母親の心情が中心的なモチーフであるが、それぞれの詩には、その1編でしか造形できない主張がある。まず、標題にもなっている、“Woman to Man”であるが、体内に新しい生命の成長を感じている女性が、自分の感覚に浮かぶ想いを、その子供の父親となる男性に語る形式で展開される。

The eyeless labourer in the night,  
the selfless, shapeless seed I hold  
builds for its resurrection day—  
silent and swift and deep from sight  
foresees the unimagined light.<sup>5)</sup>

夜のしじまに、誕生の瞬間に向けて、今だ人間としての自我も形態も備えていない‘種子’の状態の胎児が動き、成長し、‘復活の日’を待つ。「これは、子供の顔をしてはいるが、子供になっていないもの (This is no child with a child's face)」であり、いずれ名前がつくものの、今だ名前のないものである。しかし、「あなたとわたしは、以前から、それをよく知っていた (You and I have known it well)」と、母となる女性は、相手の男性に呼びかける。それは、生命力であり、「私たちの目の水晶体を受け継ぎつつ、血が作り上げる野生の木に、そして、花卉が重なり合う薔薇になる」と、胎児のイメージは、自然の生命の中でも、野性と美を象徴するものへと転化していく。

the precise crystals of our eyes  
This is the blood's wild tree that grows  
the intricate and folded rose.<sup>6)</sup>

その肉塊は、この自分たちを‘親としての存在’へ作り変えるものであり、自分たちから作られたものである。その誕生の瞬間、胎児は、先の尖った葉に沿って動く、まばゆい光になる。子供の誕生という、未知の経験の前に、母となる女性は、恐れを抱かざるをえない。

This is the maker and the made;  
this is the question and the reply;  
the blind head butting at the dark,  
the blaze of light along the blade.  
Oh, hold me, for I am afraid.<sup>7)</sup>

この“Woman to Man”には、詩人の態度、技法、言葉の使い方、象徴の配置、などにおいて、集められた詩編に一貫して流れている要素がかなり出てくる。外界と自己の魂に対する詩人の洞察から浮かび

上がるさまざまな想い、接尾辞 less の多様による無の状態、能動と受動の拮抗、対極をなす言葉の同時使用、子供を植物のメタファーを使って描く方法、自然への畏怖と同化、自然に生きる動植物の姿に人間の営為の様子を重ねる技法、などである。

また、“Woman to Man”の次の、“Woman’s Song”には、胎内にいる子供へ優しく語りかける言葉を紡いでいる、いわゆる「子守歌」のような調べがある。そして、“Woman to Child”では、母の胎内で羊水に浮かぶ胎児は、そこで宇宙にあるものや愛の感情を感じとっていると述べられる。その描き方には、オーストラリアの自然に生きる人間の情感がある。

There moved the multitudinous stars,  
and coloured birds and fishes moved.  
There swam the sliding continents.  
All time lay rolled in me, and sense,  
and love that knew not its beloved.<sup>8)</sup>

母の目に写るものが、胎内の子供の感覚にも伝わる。胎内では、オーストラリアの色彩豊かな自然の風物が動き、大洋に浮かぶオーストラリア大陸などが、太古からの位置を離れて移動するのが見える。時は満ち、その一種の楽園的環境から、胎児はこの世に生まれ出る。

I wither and you break from me;  
yet though you dance in living light  
I am the earth, I am the root,  
I am the stem that fed the fruit,  
the link that joins you to the night.<sup>9)</sup>

母は、この世の光の中で踊るように手足を動かしている赤ん坊を見て、アニミズム的な信仰を思わず言葉の中に、自信と肯定の心を示す。この子供にとって、私は‘大地’であり、‘根’であり、‘果実を実らす幹’であると、宣言するのである。一方、不幸にして、この世に生まれ出ることができなかった胎児も、長い間、母親の胎内にいて、母親と一体化された存在として、母親の意識の中に生きていく。“The Unborn”の後半部分では、語りが母親ではなく、胎児によるものになっている。この世に生

命として現れなかった胎児は、名前もなく、暗闇の中で横たわる。そして、自分が何であったかを声にならない声で、問う。母親にとって、子供とは、胎児の時から、命を分けた存在であり、たとえ、生まれ出なくとも、それまで共に時間を生きてきた命である。この詩は、詩人の娘の Meredith が生まれる前に書かれたものであるが、万が一の不安や恐れなどが読みとれる内容である。

#### IV. 子供と自然

*Woman to Man* には、誕生後の子供を描いたものとして、自然の中で一つの生命として生きる子供の姿と、大人が作った社会と世界の中で苦しみを経験していくその姿を描いたものがある。まず、“The Child”の中の子供は、春のさなか、一人で見知らぬ場所で、自然と同化する楽しみを得ている。他の子たちが、叫んだり、走り回ったり、物を食べたり、飲んだりする、その楽しみを避け、緑の木陰に隠れて、自分の世界に浸っている。

To hide in a thrust of green leaves  
with the blood’s leap and retreat  
warm in you;  
burning, going and returning  
like a thrust of green leaves  
out of your eyes, out of your hands and your  
feet—  
like a noise of bees, growing, increasing;  
to turn and to look up,  
to find above you the enfolding, the exulting  
may-tree  
shakes the heart.<sup>10)</sup>

オーストラリアの春の息吹に抱かれて、一人、心臓を巡る血の鼓動も聞きながら、緑の葉陰に隠れている子供。その子は、蜜蜂の羽音のように音を立てながらも、振り返ったり、上を見上げたりして、頭上にサンザシの花を見つけて、心踊らせている。因みに、サンザシの花言葉は、「希望」であり、しばしば生け垣などに使われている。

しかし、そのままの自然の中で、無垢な子供でいられ

る時間は限られている。“The World and the Child”の中の子供も、植物のメタファーで説明されつつ（He has not yet put out leaves）、自然児の状態のままにすることができなくなる。人間にとって、「物には名前もないし、過去や未来の時間を区別することもない（Nothing is named; nothing ago, nothing not yet）」世界はありえない。子供たちはすぐ、さまざまな意味と規則の世界を前に、知識を獲得する苦しみを経験していかなければならないのである。

Out of himself like a thread the child spins  
pain  
and makes a net to catch the unknown world.  
Words gather there heavy as fish, and tears,  
and tales of love and of the polar cold.  
Now, says the child, I shall never be young  
again.  
The shadow of my net has darkened the sea's  
gold.<sup>11)</sup>

知恵ではなく、知識を網でかき集めた結果、子供たちは、無垢でいられるはずはない。自然の豊さを利用する大人の思考回路に慣らされ、自然をそのまま享受することができなくなる。しかし、世界や自然には、人間の頭脳、つまり、知識を集める網が耐える以上のものがある。知性で向かう人間の能力を超えた領域が、人間を打ち負かすのである。

その他、この詩集には、オーストラリアの自然と人間の関わりを詠ったものも多いが、静的なイメージを与える植物を描き、なおかつ、女性の生命力を想起させる詩があるのが特徴である。海の貝殻や珊瑚礁に自然の力と生命の勢いを見る“Conch-shell”と“The Builders”，夜の庭で、蜜と月光を吸いながら、人の生活に寄り添いつつ、根を深く降ろしていく“Camphor Laurel”，そして、丘の稜線から、血のような深紅の花を咲かせている flame-tree を、死のイメージを重複させながら描いた“Flame-tree in a Quarry”などが、その代表的な詩である。

しかし、オーストラリアの自然は、広大な大地を持つ故に、人間を破滅させる力も大きい。夏の乾燥と猛暑が

引き起こす森林火災や、人を飲み込む洪水などは、自然の脅威の前に立つ人間の脆弱さを感じさせずにはおかない。“Night after Bushfire”では、その火災の後の荒涼とした夜の風景が立ち現れ、火の勢いのすさまじさは、“The Bushfire”の中で、擬人化された火の言葉となって、増幅されている。オーストラリアでは、12月頃から、乾燥と熱のため、時々森林火災が起こる。このような森林火災をうまく利用する植物があることは、よく知られている。つまり、高温の熱が加わらないと、種子が発芽の前段階へ進まない植物があり、要は、この森林火災があると、新しい木が生えてくるわけである。全てを燃え尽くしていく火が、かえって新しい植生には役立つという逆説は生命の神秘と共に、Judith Wright の詩がはらむ ambivalence にも適合する。

Too sharp, too bright  
burned this winter's sun. The wind's fire  
fever  
withered and pierced. O time that brings us  
harm,  
undoes our knowledge, dries our sap and  
love-  
upon the burning mountain burns the palm  
within the burning grove.<sup>12)</sup>

南半球では、北半球とは逆の気候であることを利用した、‘冬の太陽はあまりにも鋭く、明るく燃えさかっていた（Too sharp, too bright/burned this winter's sun）’という表現も、oxymoron の技巧に近づく。

この詩の中で、擬人化された火は、燃える物を求めてはむさぼりつくしたあげく、灰と化した物を残して、自らは消滅、つまり、死んでいく。一方、火に襲われても、地に根を下ろしている大木は、逃げることは不可能で、長い年月をかけて形造った、地上に見える部分は灰にならざるをえない。しかし、オーストラリアの大地に生きる生命として、「勝利」を花言葉として持つヤシの大木は、自律的に自らを燃やし、新しい生命への糧とするのである。

“I am that which is unbuilt but to renew,”

says the palm. "I was time's living scale,  
and that alone in me is given to fire.  
Also, I scaled time; here upon his crest  
I toss my fronds of flame. It is the eaten shell  
only that vanishes, fibre and leaf that fall.  
I am the Thing, thought's crystal residue.  
Worm and flame at my heart in their fierce  
love  
touch me not, nor know me. I burn alone  
within the burning grove.<sup>13)</sup>

時を計り、その時間を見える形にした物として、ヤシの木は、古い衣といえる枝や葉を燃やし、太古からの命を示すべく、新生への段階にいることがよくわかる。

この詩集の最後を飾っている“The Blind Man”には、Judith Wright が独自の視点で描くテーマが再び描かれている。その詩行からは、オーストラリアの歴史を生きる人々の姿が浮上してくる。五部構成のこの詩は、オーストラリアの移民とその子孫の人生、小さな町の様子、子供と盲目の男、いなくなった子供、盲目の男の歌、という区分はあるものの、詩人の人生観が底流として、全体のトーンを決定している。第一部の (i) The Dust in the Township では、移民の4代目の子孫で、祖母がアボリジニーの (Black) Mary である、盲目の Jimmy Delaney が語る。

Under the Moreton Bay fig by the war memorial  
blind Jimmy Delaney sits alone and sings  
in the pollen-coloured dust; and Jimmy Delaney  
coloured like the dust, is of that dust  
three-generations made.<sup>14)</sup>

‘戦争’、‘盲目’、花粉の黄色い‘ちり’、人の死後の状態を示す聖書的な表現の‘塵’、などが、冒頭の部分に登場する人間である Jimmy にまつわる言葉である。彼は、瘦せて、古ぼけた楽器のフィドルのような音＝声で詠っている。

まず、オーストラリアへの移民である1代目の Horrie Delaney は、この地に家畜を連れてやって来た。そして、‘黄金の眠り’の状態の大地から、‘ちり’を立てた

(shook the dust out of its golden sleep)。つまり、牧畜などのための開墾から舞うちりである。彼は、犬を連れ、銃を携えて、大地と太陽の間から影のように現れ、やがて亡くなり、同じ民族の仲間と共に地上から消えて行った。2代目の Dick は、先住民のアボリジニーの女性と結婚し、周囲の自然を征服し、搾取した。当然のこと、アボリジニーの世界観とも合わない、そのやり方は「肌の色の違う民族の間に、暗黒の憎しみ (the black hate between the white skin and the black)」を引き起こした。その Dick の骨も、傷付いた大地の棚ともいえる場所にねじれたままになっている。3代目の Yellow Delaney は、大地を舞う黄色い塵のように、安息の地を持たない。土地も愛も持たず、彼は、嫌われ者の白人の娘と共に、放浪し、キャンプ・ファイヤーの後の黒い点しか残さない。盲目の Jimmy は、「全ては、大地と太陽の間の影にすぎない (All are but shadows between the earth and the sun)」と詠うのである。

The conqueror who possessed a world alone,  
and he who hammered a world on his heart's  
stone,  
and last the man whose world splintered in  
fear—  
their shadows lengthen in the light of noon;  
their dust bites deep, driven by a restless wind.  
O singer, son of darkness, love that is blind,  
sing for the golden dust that dances and is  
gone.<sup>15)</sup>

アボリジニーにとっても、渡って来た白人にとっても、このオーストラリアの大地は、さまざまな意味で黄金の地、golden dust である。時は変わり、人は去っても、その想いは残る。

第二部の (ii) Country Dance では、宴と踊りの後の人々の様子と、大地の声ともいうべき詩人の語りが続く。第三部の (iii) The Singer to the Child においても、盲目の歌い手と泣いている無垢の子供だけが、この世の果てから風に吹かれてやって来る幻影を見つめて、光輝く未来への流れに入ることができることが述べられる。そして、第四部の (iv) Lost Child では、いなくなった子供の行っ

た先について、盲目の歌手 Jimmy が、ファンタジーの手法で語る。最後の第五部 (V) Blind Man's Song において、この歌手は、オーストラリアの自然の声ともなる。しかし、真実を語るその声に耳を傾けるのは、愚か者 (a fool) か子供である。彼らは、大地の静けさに耳を澄ませる。そして、その静けさは、全ての悲しみを聴き、伝える男、また、生涯をかけてあらゆる恐怖を集めた、その男に返ってくる。つまり、この歌は、一人の道化 (a fool) の歌にすぎない。砂塵がおさまった時にその塵の中に、まるで黄色い蛇 (a yellow snake) のように横たわって詠う Jimmy を見て、老人は顔をそむけて去り、青年は馬に拍車をかけて逃げて行く。アボリジニーの創世神話にある虹の蛇ならぬ黄色い蛇であっても、真実を語ることには相違はない。

I have the tune of the singer who makes men  
afraid.

I repeat the small speech of the worm in the  
ground.  
and out of the depths of the rock my words  
are made.

I have laid my ear to the dust, and the thing  
it said  
was Silence. Therefore I have made silence  
speak; I found  
for the night a sound.<sup>16)</sup>

真実を知ったり、語ることには一種の恐れがつきまとう。特に、将来を担う世代を前にして、自分や先祖達がエゴイズムのためにしてしまった事柄を語る時は、罪の意識と共に恐れを避けえないものである。言葉を持たない虫や岩の深みから察知する自然の声を代弁する Jimmy は、大地の塵に耳をあて、語られない言葉を理解する。自然を傷つけ、自然と共生していた先住民を虐殺した事実は消えないからである。Jimmy は、「私は、二つの暗い舌を持った黄色い蛇で、この世の二人の支配者である愚か者と孤独な子供に向かって、塵の中から語りかけている (I am the yellow snake with a dark, a double tongue, /speaking from the dust to the two rulers of the world)」と締めくくる。

## V. 終わりに

人間が生きていく上で、時代と地域性は無視できないことは当然である。周囲の環境を変え、利便性を追求しても、変わらないのは、人間性であり、誕生から死までの軌跡を残すのが人間であることであろうか。その土地にまつわる歴史を知り、自分の生きる時代に向き合い、それを言葉の芸術にまで昇華できた詩人 Judith Wright は、彼女の感受性が捉えたオーストラリアそのものを我々に伝えてくれた女性であった。1946年に出版した最初の詩集である *The Moving Image* に続き、第二集の *Woman to Man* (1949) では、Judith Wright が、当時の自分の人生により密着したテーマを集めている。つまり、生涯のパートナーになった Jack McKinney との出会い、娘の Meredith の誕生、第二次世界大戦後の世界、などの事柄が、そのまま、この世界における自己の位置付けを考察するための鍵になったのである。

母親の視点から描いた人間の誕生、新しい生命を宿す母の目を見た世界、子供がこの現代世界で生き延びていくことを想う時の不安と期待、その子供たちが驚きの目で見るとであろうオーストラリアの自然、そして、孤独な子供に盲目の男が語る人々の歴史と人生の不可思議さ。これらは、自分の人生に入って来て、やがて自分を超えて、未来に生きる生命を実感した女性が、その生命に贈るメッセージのキーワードでもあった。冒頭のインタビューにもあったように、そのテーマこそ、次世代の生きる世界が、現在よりも良い状態であって欲しいと願う母親や女性に身近であり、女性にとっての世界観を形成するものである。その意味で、この詩集は、男性に対するメッセージよりも幼い生命や子供の魂に向けて発信している詩編から構成されていると言えるであろう。その Judith Wright の想いは、その後、数冊の児童文学の執筆、環境保全運動、世界平和への希求をテーマにした講演活動へと発展していくのである。

## Notes

- 1) Brian Kiernan ed., *Considerations: New Essays on Kenneth Slessor, Judith Wright and Douglas Stewart* (Angus & Robertson, 1977), pp. 69-79.

- 2) *ibid.*, p. 73.
- 3) Veronica Brady, *South of My Days: A Biography of Judith Wright* (Angus & Robertson, 1998), p.113.
- 4) *ibid.*, p. 116.
- 5) Judith Wright, *Collected Poems 1942-1985* (Angus & Robertson, 1994), p.27.
- 6) *Loc. cit.*
- 7) *Loc. cit.*
- 8) *ibid.*, p. 28.
- 9) *ibid.*, p. 29.
- 10) *ibid.*, p. 34.
- 11) *ibid.*, p. 37.
- 12) *ibid.*, p. 47.
- 13) *Loc. cit.*
- 14) *ibid.*, p. 62.
- 15) *ibid.*, p. 64.
- 16) *ibid.*, p. 68.
- 9) Kiernan, Brian ed. *Considerations: New Essays on Kenneth Slessor, Judith Wright and Douglas Stewart*, Sydney; Angus & Robertson, 1977.
- 10) Lever, Susan ed. *The Oxford Book of Australian Women's Verse*, Melbourne: OUP, 1995.
- 11) J. マーチン著, 古沢みよ訳。『オーストラリアの移民政策』, 東京: 勁草書房, 1987。
- 12) Rowe, Noel. *A Reader's Guide to Contemporary Australian Poetry*. St. Lucia: University of Queensland Press, 1995.
- 13) 関根政美, 他著。『概説オーストラリア史』, 東京: 有斐閣, 1988。
- 14) G. シェリントン著, 加茂恵津子訳。『オーストラリアの移民』, 東京: 勁草書房, 1985。
- 15) Page, Geoff. *A Reader's Guide to Contemporary Australian Poetry*, St. Lucia: University of Queensland Press, 1995.
- 16) Strauss, Jennifer. *Judith Wright*, Melbourne: OUP, 1995.
- 17) Strauss, Jennifer. *The Oxford Book of Australian Love Poems*, Melbourne: OUP, 1993.
- 18) Tranter, John & Philip Mead eds. *The Penguin Book of Modern Australian Poetry*, Ringwood: Penguin Books Australia, 1991.
- 19) Walker, Shirley. *Flame and Shadow: A Study of Judith Wright's Poetry*, St. Lucia: University of Queensland Press, 1991.
- 20) Wilde, William, et. al. eds. *The Oxford Companion to Australian Literature*, 2nd edition, Oxford: OUP, 1994.
- 21) Wright, Judith. *Collected Poems 1942-1985*, Auckland: Angus & Robertson, 1994.
- 22) Wright, Judith. *The Generation of Men*, Sydney: An Imprint Book, 1995.

## Bibliography

- 1) Bennett, Tony et. al. eds. *Celebrating the Nation: A Critical Study of Australia's Bicentenary*, St. Leonards: Allen & Unwin, 1992.
- 2) Brady, Veronica. *South of My Days: A Biography of Judith Wright*, Auckland: Angus & Robertson, 1998.
- 3) Cathcart, Michael. *Manning Clark's History of Australia*, Melbourne; Melbourne University Press, 1993.
- 4) N. グリープ他編, 加藤愛子訳。『フェミニズムとオーストラリア』, 東京: 勁草書房, 1986。
- 5) Hampton, Susan & Kate L. Lewellyn eds. *The Penguin Book of Australian Women Poets*, Ringwood: Penguin Books Australia, 1986.
- 6) Hergenhan, Laurie ed. *The Penguin New Literary History of Australia*, Ringwood: Penguin Books Australia, 1988.
- 7) Isaacs, Jennifer. *Pioneer Women of the Bush and Outback*, Smithfield: Gary Allen, 1990.
- 8) 石橋百代。『オーストラリアの女性』, 東京: ドメス